

乙川中学校のみなさま

おはようございます。

このたび、アメリカの文学賞にノミネートされた私の本は、英語で書かれています。その英語に、私が最初に出会ったのが乙川中学校でした。みなさんの世代は、もう小学校で英語に触れていると思いますが、私の世代は、つまり、ちょうど100年ぐらい前のことですが、中学で初めて英語を習ったのです。

言い換えれば、今の皆さんは、もうすでに当時の私をリードしているわけです。ですから、どうかこのリードを保ったまま、私の先をどんどん進んでいって、ゆくゆくはいろんな賞を受賞して、できれば最後はノーベル賞でフィニッシュしてください。

英語に関しては、当時の私は、学校の授業の他にNHKラジオの「基礎英語」を毎朝聴いていました。ラジオの前で声に出して英語を発音したり、アメリカ人の先生が話す英語を必死に聞き取っていました。あるときは、難しすぎて腹が立って、テキストを破り捨てたこともありました。でも、翌日起きてみると、母親が緑色の毛糸でテキストを縫い直してくれました。自分の子供っぽさを思い知らされ、本当に恥ずかしい思いがして、それからくじけそうになるたびに、緑の毛糸を思い出して頑張りました。それから毎朝、NHKの英語番組を高校2年まで聞いていました。

もうひとつ、これは英語ではないですが、私は「若あゆ日記」を書き続けていました。国語の先生だった中二の担任が厳しくて、ほとんど強制的に書かされたのが始まりです。私は点取り虫だったので毎日提出していましたが、ささやかな抵抗として、ときどき先生に対する不満を皮肉やたとえ話の形で、こっそり書くこともありました。もちろん先生は何もかもお見通しだったのでしょうが、私としては、先生に気づかれないギリギリのところまでペンを操るといって高等テクニックを駆使していると思込んでいました。なにしろ中二ですから、仕方ありません。先生の寛大さのおかげで、毎日「若あゆ日記」で、ちょっとしたスリルを感じながら文章修行ができたことに感謝しています。

以上、私の話を一言でまとめると、「継続は力なり」です。中学時代、基礎英語も若あゆ日記も、いったい何の役に立つのかよくわからぬまま続けていただけでした。振り返ってみると、乙川中学で日々修行していた英語力と文章力がなければ、大人になって英語で本を書き、アメリカで勝負することはできなかったと思います。

ですから今、中学時代を生きている皆さん、私の後輩である皆さん、今日、家に帰ったら、さっそく若あゆ日記に書くことから始めてください——「エドガー賞なんちゃらとかで浮かっている先輩のおじさんが、緑の毛糸がどうか長々しゃべっていたが、結局、継続は力なりの一言で済む話だった。あのおじさんも、まだ文章修行が足りないようだ」、みたいな感じで。では、皆さん、お元気で。

2019年4月18日 竹内康浩